

## 意図の無限後退問題とは何だったのか

三木那由他 (Miki Nayuta)

大阪大学

---

話し手が何かをすることで何かを意味するという現象は「話し手の意味(speaker meaning)」と呼ばれる。Grice (1957)以来、話し手の意味は発話において話し手が持つ意図を特定することによって、その必要十分条件が与えられるものと目されてきた。そうした見解は、意味という概念が一般に意図という概念によって説明されるとする意図基盤意味論(intention-based semantics)という立場の主要な柱のひとつをなす。

グライスによる話し手の意味の分析に対し、Strawson (1964)はある反例を挙げた。そしてストローソンが懸念し、Schiffer (1972)が明示的に定式化したように、ストローソンの反例はグライスが挙げた分析に無限後退を引き起こす出発点となった。従来の分析のやり方では、話し手に無限に多くの意図が帰属されることとなってしまうのである。この意図の無限後退問題に直面し、意図基盤意味論者たちはそれぞれの仕方での回避を試みてきた。

シファアの診断では、意図の無限後退問題は話し手の意味に関するある事実を示している。それは「 $S$ が  $x$ を発話することで何かを意味とするならば、何かを意味するという必要となる意図のすべてが表に出て(out in the open)いなければならない」ということである(Schiffer 1972, p. 39)。こうしてシファアは相互知識という概念を用いた分析を提案することになるが、結局のところ Harman (1974)によってそれが問題を回避していないことを指摘され、のちにシファア自身もそれを受け入れたうえで意図基盤意味論による話し手の意味の分析を放棄するに至る(Schiffer 1987)。その後にもいくつかの代案が提起されてきたが、いまだこの困難を乗り越えた意図基盤意味論的な分析は手に入っていない。

本発表では改めて、過去に提案されてきた意図基盤意味論による話し手の意味の分析がいずれも意図の無限後退問題を生じさせるか、さもなければ問題含みの自己言及性に訴えるに至るということを確認し、そのうえでなぜこのような問題が生じるのかを検討したい。本発表での提案は以下の通りである。意図基盤意味論の分析では三つの想定が置かれてきた。(1)話し手の意味の分析では、話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解した(すなわちコミュニケーションが成功した)暁には、まさに話し手の意味という現象が成立していることそのものが表に出ている(それゆえ聞き手に認識されている)のでなければならないという、「話し手の意味の透明性」とでも呼ぶべき想定が置かれている。話し手はこっそりと何かを意味し、それによってコミュニケーションに成功することはできない。(2)話し手の意味の分析はコミュニケーション成功時に成り立つ事態(「実現状況」と呼ぼう)を

特徴づけたうえで、それと話し手の発話という行為を目的論的に結びつけることでなされることになっている（「目的論的説明」の想定）。(3)発話と実現状況との目的論的結びつきは、話し手の意図という命題的態度を用いて具体化される（「表象主義」の想定）。すなわち話し手の意味とは、実現状況を実現させようという意図とともに発話がなされることとして分析されることになるのである。しかし、これらを同時に採用したならば循環が生じる。この循環が意図基盤意味論という特定の枠組みのもとでは意図の無限後退問題というかたちで現れているのである。

事態がこの通りであるならば、話し手の意味の分析は上記三つの想定のいずれかを捨てることで進められなければならない。しかし意図基盤意味論はそうした反省をすることなく、ただ話し手に要求される意図や想定される実現状況を修正することで困難を打開しようとし続けており、だからこそ袋小路に陥っている。私の考えでは、(1)の想定は話し手の意味という現象をめぐる基礎データに当たるものであり、排除すべきではない。また(2)は話し手の意味を構成する行為とそうでない行為との区別を引く基準をその目的以外に見いだせない以上は、捨てるようがない。それゆえ(3)こそが話し手の意味の分析において切り捨てられるべきなのであるが、これはとりもなおさず意図基盤意味論とは異なる道を探るということになる。

## 文献

- Grice, P. (1957). 'Meaning'. *The Philosophical Review*, 66: 377-388. Reprinted in Grice (1989), *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge: 213-223.
- Harman, G. (1974). 'Meaning by Stephen R. Schiffer'. *The Journal of Philosophy*, 71: 224-229.
- Schiffer, S. R. (1972). *Meaning*. Oxford University Press, Oxford.
- Schiffer, S. R. (1987). *Remnants of Meaning*. The MIT Press, Cambridge.
- Strawson, P. F. (1964). 'Intention and Convention in Speech Acts'. Reprinted in Strawson (2004), *Logico-Linguistic Papers (2nd ed.)*, Ashgate, Hampshire: 115-130.